

なおキンパラナガハシカが根室標津付近のナラの切株に発生していたことは珍しいことと思われる。

東亜の *Ischyropsalidae* について

鈴木正将 (広大・理・動物)

Ischyropsalidae は系統的にかなり古い、純全北区系の特異な盲蛛群である。東亜には、それぞれ同科の二つの主要な系統に属する *Sabacon* と *Nippopsalis* の2属を産する。*Sabacon* 属は往時には全北区全域に広く繁栄していたようだが、現在ではむしろ衰退過程にあり、わずかに東亜、ことに日本列島においてのみ割合よく保存されている。*Nippopsalis* はごく最近欧州産の *Ischyropsalis* から独立した東亜固有の属で、それは口器の構造および胸板の状態において、*Ischyropsalis* 並びに北米の *Taracus* と一連の派生的関係を保持する。これら3者は、互いに異所的近縁属とみなさる。このように本科の一つの系統は欧州、東亜、米大陸の3地域に広く共通的に分布するが、他の群は3地域において置換的に属を変化させている。つまり本科から見ると、欧・亜・米は本質的には共通性をもつが、同時にそれぞれの独自性をも発達させていると言える。

本州二溝帯および吉野川・物部川低地帯の生物地理学的意義

大野正男 (東洋大学・生物)

クビボソトビハムシ *Pseudoliprus hirtus* (Baly) (鞘翅目、ハムシ科) には、原亜種の他に、*tosanus* および *flaviceps* の2亜種がある。演者は日本列島を広く調査した結果、これら亜種の分布境界が本州二溝帯(新称)(曲良川-加古川および円山川-市川の両低地帯)と四国の吉野川(徳島)と物部川(高知)とを結ぶ低地帯にあることを知った。

この境界線附近は、従来、狭い範囲(例えば物部川の東西、吉野川の南北など)で生物地理上の問題が論じられたことはあるが、また太平洋から日本海にぬける境界線としてとりあげられたことはないようである。そこで演者は、クビボソトビハムシの属名 *Pseudoliprus* をとり、とりあえずこの境界線を ***Pseudoliprus*** 線となづけ、更に資料を加えてこの

地帯の生物地理学的意義を検討して行きたいと考えている。

津軽海峡附近の底生無脊椎動物(予報)

山田真弓 (北大・理・動物)

北海道近海の底生無脊椎動物についての分類および生物地理学的知見をさらに十分にするための第一段階として、1965年および1967年、東大海洋研「淡青丸」にておもに津軽海峡付近の大陸棚およびさらに深い約2,000mまでの海底ドレッジを行った。採集標本は海綿類より魚類までの約300種に達した(軟体動物を除く)。これらの種類の同定は未だ正確には行なわれていないが、ヒドロポリプについては約70種を既に明らかにした。このうち北日本を含めた北西太平洋海域より未記録のものは約1/3に達した。まだ資料は十分なものではないが、今回の調査で得られた標本からみると、津軽海峡付近の底生無脊椎動物相には寒流系、暖流系の両方の要素が認められることは従来いわれてきた通りであるが、浅海を除いた大陸棚およびそれ以深については、暖流系の種よりも寒流系の種の方がかなり優勢であることが認められた。

North Pacific subtropical counter Current と小笠原諸島の貝類相について

大山 桂 (地質調査所)

宇田道隆博士がこの流れを最新の知見から紹介したので生物地理学的見地から検討した結果を紹介する。黒潮がこの流れの西側にあるので、黒潮のような著しい例は見られなかった。しかし *Sphaerocornia* については、この流れを考えたい分布がみられた。この類は Polynesia から東南アジアにかけて分布するが、サヤマキサゴ *Pleuropoma* (*Sphaerocornia*) *capsula* (Pilsbry) は小笠原島に産し、近似種 *P. (S.) yaejimensis* (Pilsbry) は八重諸島に産する。Wagner(1909)はこの両種を南西諸島ないし台湾に産するグループに編入したが、形態は、New Caledonia に近いものがある。小笠原島に別のグループが多産するサヤマキサゴが小笠原に分布する前に、ヤエヤマキサゴが八重山に分布し